

原著

## 汗かきの中高生をもつ母親の心配事

藤 後 悦 子<sup>1)</sup>・山 極 和 佳<sup>2)</sup>

Sweat Concerns of Mothers with Sweaty middle and High School Students

Etsuko Togo<sup>1)</sup> and Waka Yamagiwa<sup>2)</sup>

## 要 約

中高生で「汗かき」の子どもを持つ母親200名を対象に母親の心配事を明らかにした。子どもの汗に対して子ども自身がどの程度気にしているかを母親に確認したところ、合計59.5%の子どもが汗を気にしていると母親が認識していた。また母親の認識では、子どもが汗を気にするようになった平均年齢は、11.07歳 ( $SD = 3.42$ ) であった。「汗に対する人の目」は母親の心配よりも子どもからの相談が多く、「対人関係における汗に関する困りごと」と「学校生活（授業や部活など）における汗に関する困りごと」は、母親の心配の方が多かった。母親自身の汗かきの程度による心配事の内容を検討すると、「汗の匂い」「対人関係における汗に関する困りごと」「汗への対処」において、汗かきである母親の心配事が有意に多く、汗かきでない母親の心配事が有意に少なかった。子どもの汗に関する相談相手は、夫が最も多く、続いてかかりつけ医、教師であったが「誰にも相談したことがない」母親も61.5%と高かった。心配事に関する自由記述の内容に対して共起分析を行った結果、「臭さを気にする」、「手の汗等に対する友達からのネガティブな反応」、「汗による洋服の色の変色」、「汗をかくことを気にする」、「周囲のネガティブな反応への心配」、「汗の匂いが気になる」に分類された。今回の調査より子どもの汗に関して母親も傷ついており、親子ともにサポートの必要が示唆された。

キーワード：汗, 思春期, 心配事

Keywords : Sweat, Puberty, Worry

## 1. 問題と目的

「汗」は誰にとっても身近なものであるが、「汗」で困り苦しんでいる人も多い。大学生を対象に実施した「汗の困り感」に関する調査では、自分自身の汗に対する意識について、自分を汗っかきだと「思う・やや思う」者は約67%であり、自分自身の汗を「気

にする・やや気にする」者は約87%であった（山極・藤後, 2022）。「汗」の量が多い多汗症は、障害者総合支援法の特定指定難病に指定されている疾患であり、その背景には特に原因のない原発性のものと、他の疾患に合併して生じる続発性のものがある。原発性多汗症は、精神的負荷に関係せずに、日常生活や仕事に支障が生じるほど発汗する疾患である

1) 藤後 悦子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

2) 山極 和佳 東京未来大学モチベーション行動科学部 (Tokyo Future University)

(藤本他, 2023a)。しかし中高生の腋窩多汗症患者と母親にその原因を尋ねたところ「病気」と回答した割合は中高生で3.3%、母親で1.9%と両者ともに低かった(藤本他, 2023b)。

このように多汗症に関する病識理解は低く、前述の調査結果からも多汗症の診断を受けていないが、汗の量が多いことに悩み苦しんでいる人々が多いのである。さらに汗の不快感という身体的な大変さのみでなく、他者からのネガティブな反応がより当事者を苦しめている。藤後他(2022)では、汗の状況への周囲の無理解による孤独感と一般的な孤独感を規定する要因について調べた結果、過去の他者からのネガティブな経験が汗の状況への周囲の無理解による孤独感を強めていた。同様の結果が、腋窩多汗症患者を対象とした研究からも示されており、症状や疾患に対して、41.8%が周囲から「理解を得られていない」「あまり得られていない」と回答した(藤本他, 2022)。

それでは、子ども達は汗に関して悩んだときに誰に相談するのであろうか。汗に特化した調査は少ないが、例えば6953名の15歳～25歳を対象とした調査(ネオマーケティング, 2021)では、困ったときに相談する相手は、母親58.6%が親友51.9%を上回って最も高かった。高校生に限定してみても母親53.8%であり、親友53.3%を超えていた。中学生を対象とした学研教育総合研究所(2020)の調査では、悩み事の相談相手は、男女ともに母親が多く、特に女子では友達への相談が53.0%に対して母親は84.0%であった。

このような子どもから頼られて、子どもの苦しみを目の当たりにすることの多い母親であるが、「汗」の多い子どものことを母親がどのように理解し対応しているのか、という母親の視点を取り入れた研究は藤本他(2023b)以外ほとんど見当たらない。藤本他(2023b)は、中高生の腋窩多汗症に対する認識調査として、中高生患者と母親を対象にインターネットアンケート調査を行った。その結果、中高生の腋窩多汗症を持つ子どもの母親のうち、子どもが

「かなり悩んでいると思う/悩んでいると思う」と答えた者は65.6%であり、中高生自身が90.7%であったの対して少なかった。さらに母親は「ワキ汗で医療機関に行くのは大げさ」と28.9%が考えており、皮膚科で適切な診断・治療が受けられ、保険適応で治療できると理解しているのは8.8%に留まっていた。このように最も身近である母親も子ども自身が抱えている葛藤を理解することが難しい現状である。

さて、子どもにとって身近である母親に焦点を当てた場合、母親自身が多汗症であるかどうか子ども理解に影響するのではないかと考えた。また親としてどのようなことが心配であるのか、具体的なエピソードを得ることで、より丁寧な支援が検討できるであろう。そこで本研究では、子どもに近い存在である母親が子どもの「汗」の状態をどのようにとらえているのかを探索的に明らかにし、加えて母親自身の汗かきの状況も含めて検討することを本研究の目的とする。

## 2. 方法

### 調査参加者

「あなたのお子様に、汗かきな方はいらっしゃいますか。」という質問に対して「はい」と答えた中高生の子どもを持つ母親200名を対象とした。子どもの内訳は中学生、高校生の男女各50名の合計200名であった。母親の平均年齢は、46.84歳( $SD=4.86$ )であった。子どもの平均年齢は、15.30歳( $SD=1.67$ )、男女別には男子15.29歳( $SD=1.81$ )、女子15.31歳( $SD=1.52$ )であった。なお本研究では、多汗症の認知度が低いことを考慮し、多汗症という用語を用いず「汗かき」として扱うこととした。

### 調査期間

2023年3月

### 調査手続き

オンライン調査会社を通して調査を実施した。

## 倫理的配慮

東京未来大学の倫理審査委員会の許可を得た。調査への参加は自由意思であること、研究者は氏名にアクセスできないこと、データは厳重に管理すること、結果の公開は学術的使用のみ行うことなどを記載して同意を得た。

## 調査項目

### デモグラフィック変数

母親自身の年齢、子どもの年齢と性別

### 母親が認知する子ども自身が汗を気にする程度

「お子様は、自身の汗かきをどの程度気にしていますか。」と尋ね、気にしていない(1)、あまり気にしていない(2)、やや気にしている(3)、気にしている(4)の4段階で回答を求めた。

### 母親が認知する子どもが汗を気にし始めた年齢

子どもから相談を受けた内容(複数選択): 次の選択肢から回答を求めた。汗の匂い、汗の見え目(汗ジミ、手や額にかいた汗など)、対人関係における汗に関する困りごと、恋愛における汗に関する困りごと、学校生活(授業や部活など)における汗に関する困りごと、汗への対処(洋服や制汗製品の購入等)、汗の治療や病院について、進路選択(進学や職業)における汗に関する困りごと、汗に関する金銭的支出(金銭的負担)、その他であった。

### 母親が子どもの汗のことに気づいた年齢

子どもの汗に関する心配事: 次の内容から複数回答を求めた。子どもが汗で悩みを抱えていること、汗の匂い、汗に対する人の目(汗ジミ、汗の量)、対人関係における汗に関する困りごと、学校生活(授業や部活など)における汗に関する困りごと、汗への対処(洋服や制汗製品の購入等)、汗の治療や病院について、進路選択(進学や職業)における汗に関する困りごと、汗に関する金銭的支出(金銭的負担)、その他であった。

### 子どもの汗に関する心配事(自由記述)

子どもの汗に関する相談相手: 夫、夫以外の家族や親族(親、きょうだいなど)、教師、養護教諭(保健室の先生)、習い事の先生、ママ友、かかりつけ

医(小児科、内科、皮膚科など)、汗に関する専門医、その他の医療機関、スクールカウンセラーなどの心の専門家、インターネットを介した他者、誰にも相談したことはない、その他とした。

母親の汗かきの程度: 汗かきである(3)、やや汗かきである(2)、汗かきでない(1)の3件法で尋ねた。母親自身の汗の気になる程度: 気になる(3)、やや気になる(2)、気にならない(1)の3件法にて回答を求めた。

### 母親自身の汗に対するネガティブな経験(自由記述)

母親自身の汗に関する相談経験: 相談したことがある、相談したことはない(相談したくない)、相談したことはない(相談できる相手がいない)、相談したことはない(誰・どこに相談したらいいかわからない)、相談したことはない、の中から回答を求めた。

母親自身の汗に関する治療経験: 治療経験がある、治療経験はない(治療したくない)、治療経験はない(どこで治療できるかわからない)、治療経験はない、から回答を求めた。

## 3. 結果

### 母親が認知する子ども自身が汗を気にする程度

子どもの汗に対して子ども自身がどの程度気にしているかを母親に確認したところ、「気にしている」51件(25.5%)、「やや気にしている」68件(34.0%)であり、両者を合計すると、59.5%の子どもが汗を気にしていると母親は認識していた。子どもが汗を気にするようになった年齢は、0歳から17歳までばらつきがあり平均値は11.07歳( $SD = 3.42$ )であった。10歳18.5%、12歳19.0%と小学校高学年で気にし始める子どもが多かった。一方で、11.7%が就学前から気にしていると認識していた。母親は、子どもが汗で悩みを抱えていることに対して28.5%が心配だと答えていた。母親の心配と子どもからの相談内容の各項目について「心配」と回答した比率を対応ありのウィルコクソンの符号化順位検定にて比較した結果、「汗に対する人の目」は母親の心配よりも子どもからの相談が多く( $Z = 3.53, p < .001$ )、「対人関係における汗

Table 1 汗に関する母親の心配と子どもからの相談内容（複数回答）

	母親の心配 内容 n=200 (%)	子どもからの 相談内容 n=180 (%)	Z値	p値
1 汗の匂い	97 (48.5)	79 (43.9)	1.19	n.s.
2 汗に対する 人の目(汗ジミ、 汗の量)	94 (47.0)	115 (63.9)	3.53	**
3 対人関係に おける汗に関す る困りごと	36 (18.0)	16 (8.9)	2.54	*
4 学校生活(授 業や部活など) における汗に関 する困りごと	55 (27.5)	34 (18.9)	2.22	*
5 汗への対処 (洋服や制汗製 品の購入等)	53 (26.5)	53 (29.4)	1.28	n.s.
6 汗の治療や 病院について	12 (6.0)	12 (6.7)	0.56	n.s.
7 進路選択(進 学や職業)に おける汗に関す る困りごと	6 (3.0)	2 (1.1)	1.08	n.s.
8 汗に関する 金銭的支出(金 銭的負担)	3 (1.5)	4 (2.2)	1.34	n.s.
9 その他	11 (5.5)	12 (6.7)	1.08	n.s.

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

に関する困りごと」( $Z=2.54$ ,  $p=.011$ )と「学校生活(授業や部活など)における汗に関する困りごと」( $Z=2.54$ ,  $p=.026$ )は、母親の心配の方が多かった。

#### 母親の汗かき程度における子どもの心配事

次に汗に関する母親の心配内容について、母親自身の汗かきの程度(1汗かきである、2やや汗かきである、3汗かきでない)によるクロス分析を行ったところ「汗の匂い」( $\chi^2(2)=7.56$ ,  $p=.023$ )、「対人関係における汗に関する困りごと」( $\chi^2(2)=7.77$ ,  $p=.021$ )、「汗への対処(洋服や制汗製品の購入等)」( $\chi^2(2)=11.39$ ,  $p=.003$ )で有意差が示された。残差分析の結果、「汗の匂い」、「対人関係における汗

に関する困りごと」、「汗への対処法(洋服や制汗製品の購入等)」において、汗かきである母親の心配が有意に多く、汗かきでない母親の心配が有意に少なかった。

子どもの汗に関する相談は、夫(26.5%)が最も多く、続いてかかりつけ医(9.0%)、教師(8.0%)となり、「誰にも相談したことがない」母親が61.5%にものぼった。また「汗かきである」と「やや汗かきである」の121名の母親は自身も汗について「相談したことがある」者は15.7%にすぎず、「治療経験がある」者は6.6%のみであった。

#### 子どもの汗に関する心配事の自由記述の分析

本研究では、自由記述の内容をKH Corder(樋口, 2020)を用いて分析した。初めに、自由記述の内容を形態素分析した結果、総抽出語1789語、異なり語数372語であった。次に、語句の出現頻度を確認したところ、「汗」「特に」「匂い」「友達」「臭い」「洋服」「手汗」「本人」「気にしている」「気になる」「手」「多い」「着替え」「ベタベタ」「夏」「気」などが挙がった。

頻出語4以上を抽出して共起ネットワークを確認したところ、6つのグループが確認された(Figure 1)。1つ目は「臭い」「気」から成り「臭さを気にする」、2つ目は「手汗」「友達」「手のひら」「手」「指摘」「ベタベタ」「多い」から構成されており「手の

Table 2 頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
汗	85	ベタベタ	7
特に	30	夏	6
匂い	24	気	6
友達	17	言う	6
臭い	14	染み	6
洋服	14	濡れる	6
手汗	13	部活	6
本人	10	シャツ	5
気にしている	8	嫌	5
気になる	8	手のひら	5
手	8	周り	5
多い	8	色	5
着替え	8	頭	5



汗等に対する友達からのネガティブな反応」、3つ目は「夏」「頭」「洋服」「濡れる」「色」から構成されており「汗による洋服の色の変色」、4つ目は「汗」「本人」「気にしている」から構成されており「汗をかくことを気にする」、5つ目は「周り」「嫌」「言う」から構成されていたため「周囲のネガティブな反応への心配」、6つ目は「匂い」「気になる」であり「汗の匂いが気になる」とした。

各カテゴリーの具体的なエピソードを中心にストーリーラインを作成した。

### 「臭さを気にする」

汗かきの子を持つ母親は、子どもの汗の匂いを気にしていた。その心配の内容は、「同じクラスの席が近い友達に汗臭いと言われました」など、子どもの周

囲の人から匂いに対して指摘されることや、母親自身が子どもの匂いに敏感になっている様相が示された。

一方で、「汗の匂いが臭いのに、本人が気にしないこと」のように、匂いを気にしていないことが心配であるとのコメントも示された。

### 「手の汗等に対する友達からのネガティブな反応」

母親は、汗に関して子どもが悩んでいる姿や、子どもの汗に関する周囲のネガティブな反応が気になっていた。

子どもの悩みとしては、特に手の汗の悩みが多く、「手汗で机に手形がついたり、プリントがしわしわになったりする」、「手汗が酷くて、手を繋げない」、「手汗が多く、ノートや教科書に汗がつき、しわしわになってしまう」などが挙げられた。また、手汗は足

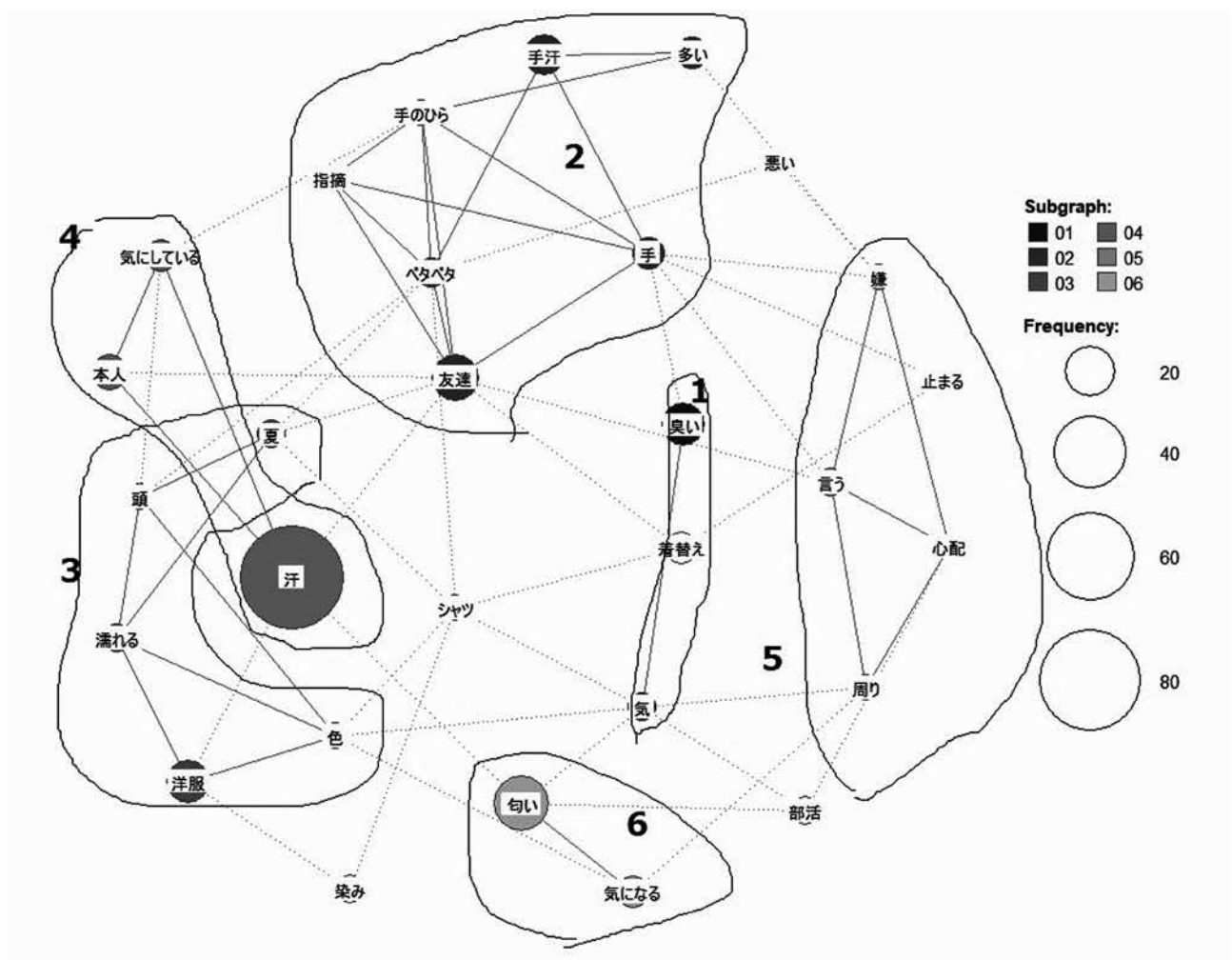


Figure 1 子どもの汗に関する心配事の共起ネットワーク

汗とセットになることが多いため、「手汗がひどい。靴下がいつも湿っている」ことも心配事として挙げられていた。

加えて、「手汗がひどく友達と手が繋げない事、汗の臭い特に首辺りのニオイを友達に指摘された事」など友達の反応に対して母親も気にしていた。

### 「汗による洋服の色の変色」

洋服に関しては、大きな悩みの一つになっていた。「白い服が黄色くなりやすい。汗疹が出来やすい」「汗をかきすぎて、黒い服に白く汗染みができていた」などの心配事が示された。これらの染みは洗濯でも落ちづらく、「制服のシャツの汗染みが、洗濯してもなかなか落ちないこと」も気に病んでいた。

また洋服のみでなく、「小さい時は頭の汗がひどく、髪がベタベタになった。今はだいぶ改善されたが夏場は気にしているよう」と、見た目に関する心配事

も示された。

その上で、「本人が夏になるのを嫌がっているのがかわいそうだと思う」と、本人が気に病んでることに対して親も気にかけていた。

### 「汗をかくことを気にする」

手に限らず、汗をかくことそのものへの心配事も示された。「友達より汗をかく、特に夏は流れるような汗」、「汗をかくことで、勉強や部活に集中できない」、「ダンスしたりする時に汗をかきすぎて本人が気にしている」など、汗の量や汗によるパフォーマンスの低下を心配していた。

また、「まわりの子から汗かきという目で見られて本人が傷つくこと」、「本人が汗を気にしていることが、とてもかわいそうです」などと、子どもが傷ついている様子に、さらに親自身も傷つき葛藤している様子が示された。

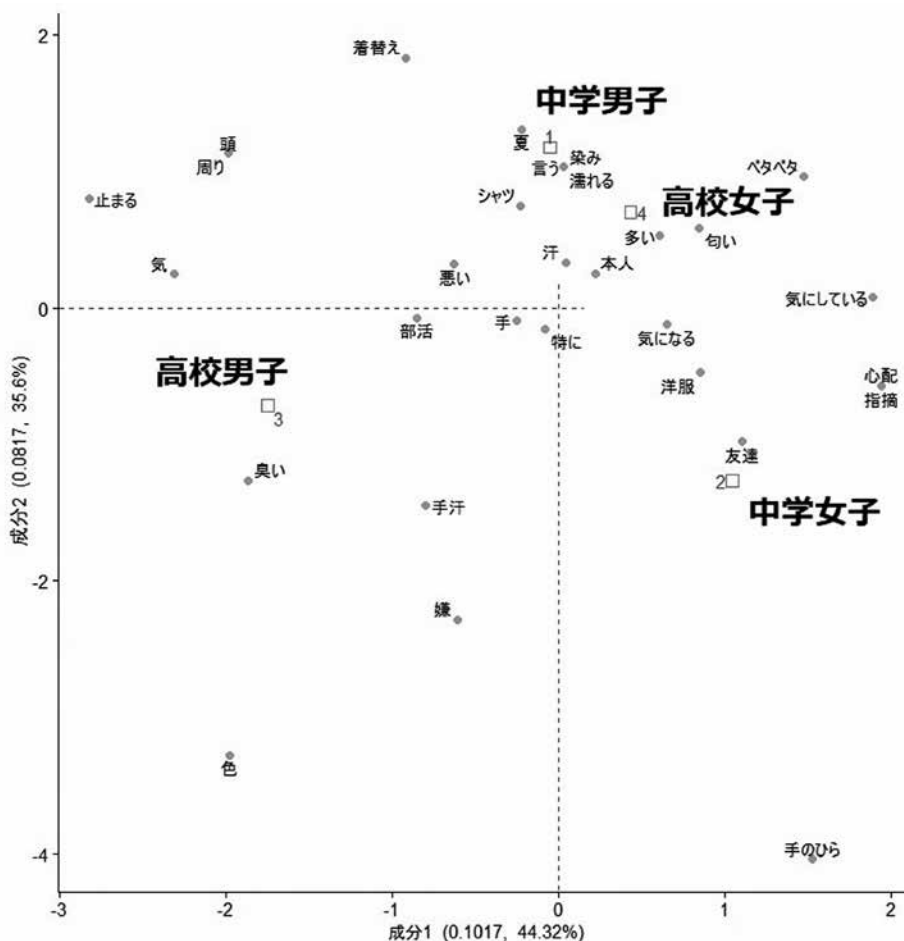


Figure 2 子どもの汗に関する心配事の対応分析

### 「周囲のネガティブな反応への心配」

母親は、周囲からのネガティブな反応で子どもが傷つくことがつらい様子であった。「周りの子に何か言われなにか心配です」、「汗が滝のようにあふれるので、「どうしたん?」と皆から聞かれるのが辛いと言っています」、「匂いがある時に対人関係で嫌な顔をされないか心配」、「汗と匂いがすごすぎて友達に何か言われて嫌な思いをしては可哀想だと心配している」など、親自身のことではないにせよ、どうしてあげることもできない苦しみを抱いていた。

### 「汗の匂いが気になる」

匂いについては、上述した内容が複合的に示されていた。「遺伝で脇の匂いがキツイ」という匂いそのものの強さ、それによって「部活の時に自分の汗の匂いが気になっていた」ように、匂いが気になる。さらにその匂いを「汗の匂いをクラスメイトに指摘された」と、他者が指摘する。「衣服をつけ置きして匂いをとらないといけない」と汗の匂いをとろうとするが、完全にはとれないため、さらに「汗の匂いが気になる」と悪循環を繰り返していた。

### 学年と性別による母親の心配事の特徴

次に性別と学年（1 中学男子、2 中学女子、3 高校男子、4 高校女子）で母親の心配事の特徴を確認するために、対応分析を実施した（Figure 2）。その結果、中学男子と高校女子が類似しており、母親の心配事として「夏」「染み」「濡れる」「匂い」などが挙げられた。中学女子は「友達」「心配」「手のひら」など本人が気にしていることなどが挙げられた。高校男子のみが他の群より離れており、「臭い」「色」「手汗」「止まる」など、嫌な思いをしているという特徴が示された。

## 4. 考 察

本研究では、汗かきの子どもを持つ母親の心配事の実態を明らかにした。

### 母親と子どもの心配事の違い

母親の約60%が子どもの汗を気にしており、特に小学校高学年ごろから子どもは気にし始めていると認識していた。腋窩多汗症患者の母親を対象とした藤本他（2023b）の研究では、母親が子どものことを心配する割合が65.6%となっており、本研究とほぼ同様の結果であった。しかし、中高生本人を対象とした藤本他（2023a）の研究では、子ども達は約90%が「悩んでいる」と回答しており、親の認識以上に子ども達は悩んでいることが示され、大人の想像以上の困難さを子ども達は抱えていると理解しておくべきであろう。

母親の心配と子どもの心配ともに多かったものは、汗の匂いでありこれは両者ともにほぼ同じ認識であった。一方、母子で認識が異なったものは、「汗に対する人の目（汗ジミ、汗の量）」と「対人関係における汗に関する困りごと」および「学校生活（授業や部活など）における汗に関する困りごと」であった。前者は、子どもの方が心配しており、後者2つは母親の方が心配していた。母親の方が子どもに比べて、「学校生活」の心配をしていることについては、対象が中・高校生という年代であったことも理由の一つとして挙げられている。中・高校生は、小学生までに比べて母親が子どもの学校生活を直接見る機会が減ることに加え、一般的に思春期は口数が少なくなるため、親は学校での子どもの様子を把握しにくい。母親は学校生活での様子を見聞きできないからこそ、子ども以上に心配してしまうのかもしれない。藤本他（2023）の研究では、母親のみでなく子どもからの回答を得ており、母親の心配事は、仲間外れやいじめられることに対して子どもより敏感であった。一方、子どもは、対人関係の前提となる他者からの視線がより気になっており、汗のシミや量も含めてどのようにみられているかに関して心配が強かった。

### 母親の経験と心配ごととの関係

母親自身の汗かきの度合いにより、汗の心配事への受けとめ方の違いを確認したところ、汗かきの母

親の方が、子どもの汗の状態に対してより心配していた。特に「汗の匂い」、「対人関係における汗に関する困りごと」、「汗への対処法（洋服や制汗製品の購入等）」については、心配が大きかった。汗への匂いや対人関係、対処法については汗かきではない母親は自身の汗に関する経験が少ないため、子どもの心配事への受けとめが弱かった。これらの汗の匂いや対人関係は、本研究で設定した心配事の中でもより具体的で直接的な経験の有無が関連する事柄であると考えられる。そのため、汗かきでない母親は、自身に汗で困った経験が少ないため、子どもの心配事への受けとめが弱かったと考えられる。過度に子どもの心配に対して反応する必要はないが、汗かきでない母親は、自分の想像以上に子ども達は葛藤しているのかもしれないと意識しておくといよいであろう。

#### 自由記述から見える母親の心配事

本研究では、自由記述の内容を共起分析した結果、「臭さを気にする」、「手の汗等に対する友達からのネガティブな反応」、「汗による洋服の色の変色」、「汗をかくことを気にする」、「周囲のネガティブな反応への心配」、「汗の匂いが気になる」に分類された。多くの内容は、藤本他（2023a）の研究結果にも含まれる内容であった。

一方、本研究からは、自由記述からより詳細な内容が確認でき、特に子どもの葛藤を目の当たりにして、母親自身が傷ついている様子が明らかになったことは特記すべきことであろう。藤後（2021）の子育て中の母親を対象とした調査では、「わが子のことに対して、他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる。」38%、「わが子に関して、他人から間違いや欠点を指摘されると憂うつな気分が続く。」41%、「人がわが子のことをどのように見ているかが気になる」50%の人があてはまると回答している。以上の結果からも、多汗症の子どものみでなく、母親を含むその家族の支援も重視されるべきなのである。

#### 多汗症の親子への支援

母親の子どもの汗に関する相談相手は、夫が最も多く、続いてかかりつけ医、教師となったが、「誰にも相談したことがない」母親が61.5%にものぼった。この中には、子どもが汗を「気にしていない」および「あまり気にしていない」と回答したのものも含まれているであろう。しかしながら、6割以上の子ども達から汗に対する人の目などの相談を受けている結果を踏まえると、どこに相談してよいか分からない母親の実態は看過できない。藤本他（2023）の調査でも医療機関への受診は少なく、約3割前後の子ども、および母親が医療機関に行くのは大げさだと思うととらえたり、どのような治療を受けるか不安であったり、医療機関で治療できることを知らなかったりという状況であった。

これらの実態を踏まえ、多汗症の子どもとその親に対してできることの第一には、多汗症に対する適切な知識を伝え、医療機関も含めて専門職に相談できる機会を作ることであろう。正しい知識の普及に向けて、藤後他（2023）は、多汗症理解のパンフレットを作成し、医療機関や教育期間で配布している。これも一つの例であるがより多くの人々に伝えられるような様々な媒体や方法を工夫しながら、多汗症に関する啓発を行っていく必要がある。

#### 引用文献

- 藤本智子・大勝寛通・深山浩・大嶋雄一郎（2022）. 腋窩多汗症の患者意識調査—インターネットアンケート調査608人の結果報告—日本臨床皮膚科学会誌, 39（3）, 431-439.
- 藤本智子・原田栄・馬場直子・大勝寛通・深山浩・島田辰彦（2023a）. 中高生の腋窩多汗症に対する認識調査：中高生患者と母親を対象としたインターネットアンケート調査 日本臨床皮膚科学会誌, 40（2）, 170-180.
- 藤本智子・横関博雄・中里良彦・室田浩之・村山直也・大嶋雄一郎・吉岡 洋・宗次太吉・羽白誠（2023b）. 日本皮膚科学会ガイドライン 原発性局所多汗症診療ガイドライン 2023 年改訂版, 日本皮膚科学会雑誌,



133 (2), 157-188.

学研教育総合研究所 (2020). 中学生白書Web 版

<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/j202008/index.html> (2023年9月9日閲覧)

樋口耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版 ナカニシヤ出版

ネオマーケティング (2021). もっと知りたい、Z世代。—情報・人との接し方とは—

<https://neo-m.jp/investigation/3441/>

(2023年9月9日閲覧)

藤後悦子(2021). 社会的子育てに必要な養護性(ナーチュ

ランス)を形成するためには—小学生の母親の自己愛と習い事への価値観に焦点をあてて—日本森田療法学会雑誌, 32 (2), 11-18.

藤後悦子・山極和佳・田所重徳・細谷律子 (2023). 汗で悩んでいませんか—多汗症とは— 多汗症リーフレット

山極和佳・藤後悦子 (2022). 大学生における汗の問題に関する意識—汗のイメージおよび記憶との関連— 保育・教育センター紀要, 9, 125-135.

本研究は、公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団の研究助成金による。

(とうご えつこ・やまぎわ わか)

【受理日 2023年11月22日】